13　満洲語西欧薬品使用マニュアル『西洋薬書』について

渡辺　純成
東京学芸大学

北京故宮博物院には，“si yang ni okto -i bithe”（西洋の薬の書，『西洋薬書』）と呼ばれる写本が 1 部蔵される．『故宮珍本叢刊』（海南出版社，2000）第 729 冊 pp. 289-442 に，本文の影印が収録されている．また，関雪玲『清代宮廷医学与医学文物』（紫禁城出版社，2008）p. 221 には，表紙の写真が収録されている．この書籍が，康熙年間に宮廷で活動したイエズス会士によって作成されたものであること，キナ樹皮など同時代西欧で用いられた医薬品の解説を含むことは，早くから知られていた．しかし，満洲語を読める科学史研究者が乏しいこともあって，内容が正しく理解されているとは言えない面もある．関雪玲の前掲書を例に挙げれば，『西洋薬書』について「分析論述了瘟疫，……等三十多種疾病的症状，病因，病理以及医療護理薬方与臨床使用方法等」（p. 222）と述べているが，病因・病理など，医学理論に関わる記述は，実は，『西洋薬書』に存在しない．また，背景としての宮廷における西欧医学を論じる際に，清朝史研究者によって翻訳上の問題点が指摘されて久しい，中国第一歴史檔案館編『康熙朝満文朱批奏摺全訳』（中国社会科学出版社，1996）を用いていることにも不安が残る．『西洋薬書』の内容を正しく理解するためには，まず，（1）満洲語に翻訳された中国医学文献をまとめて検討し，満洲語医学用語の時代的変化を押さえたうえで，（2）『西洋薬書』を，やはりイエズス会士によって作成された満洲語解剖学書『欽定格体全録』と比較しながら言語と内容とを分析し，そのあとで，（3）17 世紀西欧の臨床医療が『西洋薬書』にどのように反映されているかを，検討すべきであろう．本講演では，（1）（2）に関する現時点での結果を報告する．

『西洋薬書』は，言語面と，解説される薬品の政治文書への出現状況からみて，ほぼ 1690 年代に作成されたものとみられる．1710 年前後に作成された『欽定格体全録』に先行する．『西洋薬書』は，当時の清朝宮廷に備えられた西洋由来の薬品の，単なる使用マニュアルであって，病因や病理に関する解説は，まったく存在しない．また，薬品の製造法に関する解説も，事実上，存在しない．個々の薬品の名称すら与えずに，「黄色い丸薬」「白い丸薬」など漠然とした名称によってのみ言及することすら，ある．17 世紀西欧の医学理論の紹介は，後年の『格体全録』下編を俟たなければならない．

第 46 節では，キナ樹皮の具体的な使用法について極めて詳しく解説する（水や葡萄酒とともに摂取したり，バラ水などのシロップに混和して摂取するなど．また，投与時刻の指定）．『格体全録』下編でもマラリアについて，（当時に想定された）原因と症状の経過とについて詳しく解説しているが，『西洋薬書』における記述は，ちょうどそれと相補的になっている．

康熙帝が晩年に動悸がひどかったことを反映して，『格体全録』下編では心臓の疾病について詳しく解説しているが，『西洋薬書』では，特に心臓の疾病について強調するところはない．『格体全録』で特筆されるアルケルメス酒は，『西洋薬書』にはみえない．

『西洋薬書』には，製造過程に蒸留操作を含む薬品が多くみられる．民間に流出した西洋薬の情報を収録する後年の趙学敏『本草綱目拾遺』と異なる点は，ルビーやエメラルド，真珠などの宝石類を蒸留して得られる高貴薬が多いことである（第 6 節，第 9 節，第 10 節，第 38 節，第 41 節）．特に第 38 節は，康熙年間中葉の政治文書において，臣下に下賜されるものとしてたびたび言及される「ジュレベベラルドゥ」なる薬品が，実は真珠のジュレップ julep に他ならないことを示している．康熙帝が盛んに賜与していたのは，副作用が起こりえない砂糖水なのであった．